

2019年9月16日(月)

老球の細道500号

ウインターカップ会津地区予選雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ウインターカップ会津地区予選が大型台風の心配される9日(月)無事終了した。天候の台風は影響なかったが、コートの中での台風、番狂わせも残念ながら起きなかった。男女とも若松商業が連続優勝を果たし、男子は12連覇、女子は10連覇と会津地区における連覇記録を更新した。指導者、選手が変わっているのにもかかわらず、たとえ地区大会といえどもこれだけの連覇を成し遂げるのは素晴らしいことである。激しいディフェンス力とアウトサイドシュート力に他チームとは1日の長があると感じた。

同じチームがずっと勝ち続けることは地区の活性化にあまり良い影響を与えるものではない。若松商業の日々の努力に敬意を表すると同時に他チームの今後の奮起を期待したい。地区内で多くのチームが競り合うことによって地区のレベルが上がり、地区から県大会、全国大会に出場したチームがさらに上のレベルでも負けないで戦うことができると思う。

今大会において、特に男子のゲームにおいてNBA並みの高得点でのゲームが多かったようである。シュート力があるせいかどうかはわからないが、ディフェンス力の低下は否めない感があった。バスケットボールの面白さはオフェンス力であるが、ゲームの勝敗の面白さはディフェンス力にあると思う。ディフェンスを一生懸命やらないで点の取り合いに終始していると、より強いディフェンスのチームと対戦した時にオフェンスがまるで機能しないで大敗を喫することは良く経験するところである。

バスケットボールのゲームレベルの段階は次のような様相を見せる。地区大会レベルはシュートが入ったかどうか。県大会レベルはシュートが打てたかどうか。全国大会レベルはボールをもらえたかどうか。レベルが上がるほどディフェンス勝負となる。

私が現役選手だった頃、県大会においては自由にボールをもらい、自由にシュートを打つことができた。ところが、東北、全国大会に駒を進めるとシュートも簡単に打てなくなり、入らなくなった。前半は入っても後半は打たしてもらえなくなる。相手チームのディフェンスのレベルが県大会とは雲泥の差になった。特にレベルの差を思い知らされたのは秋田の実業団「秋田いすゞ」(後にオールジャパン優勝)と東北大会で試合をした時だった。シュートを打つどころかボールをレシーブできないほどの激しいディフェンスだった。ボールをレシーブした時はシュートまで余力は残っておらず万事休すの思い出がある。

ところで、昨年学生スポーツ界をにぎわした日大アメリカンフットボール部が今秋から復活する。コーチ陣を一新して「日本一、日本一にふさわしいチーム」を目指して準備をしているという。新コーチが強調しているのは「人間として素晴らしい集団」づくり。当たり前のことを当たり前にやる、学業との両立を図るという「規律の文化」の育成だ。

今回の大会中も色々なところからチームの「規律の文化」ができていない話を耳にした。「規律の文化」のないチームは安定しない。ディフェンスをがんばれない。安倍改造内閣のキャッチフレーズではないが、安定のないチームに次の大会への挑戦はありえない。

蝉しぐれの夏は終わった。蝉は1回しか殻破りはできないが、人間はその気になれば何度でも殻破りができる。勝つしか(葛飾)北斎は浮世絵風景画の名作中の名作「神奈川沖浪裏」を70歳で制作した。多くのチームが次の大会に向けて新しい殻破りをしてほしい。